

これまで私は数多くの仕事上のカウンターパートを広島に案内する機会を得てきた。どれほど忙な日程の中でも多くの方々が、広島訪問を強く望む。思い出すだけでも、イラン、イラク、エジプト、ウクライナといった国々からの来訪者を広島にお連れした。

彼らの母国は戦火に覆われ、政治的な激動に揺れ、あるいはテロとの闘いに直面していた。だからこそ、原爆の悲惨さとその惨禍を乗り越えて復興を遂げた広島姿に深い刺激と感銘を受けているよ

被爆80年 リレー エッセー



JICA前ウクライナ事務所長
(現世界銀行ソマリア事務所長) 松永秀樹

時空超え人結ぶヒロシマ

うに思えた。

ロシアによるウクライナ侵攻が始まったのは2022年2月24日。侵攻開始から1年もたたない23年1月、ウクライナの市民団体の代表団がその惨状を伝えるために来日した。彼らは私が当時働いていた国際協力機構(JICA)

の招聘者ではなかったが、私が代表団の一員と以前の会議で知己を得ていた縁で滞在中の調整を手伝うことになった。

当初、日程に広島訪問の予定はなかったが、彼らは週末の空き日を利用して、どうしても広島を訪れたいと訴えた。早朝、東京を出

発し、日帰りする強行軍で来広した。現在も続くドローンとミサイル攻撃に加えて、核使用の脅威にさらされる彼らにとって、1945年に広島を襲った惨禍は決してひとことではなかったのだろう。

本日は観光名所も案内したかったが、平和記念公園(広島市中区)と原爆資料館(同)を見学するだけであつという間に一日が終わった。展示物を目の当たりにした衝撃のためか、帰路の彼らは言葉少なであつた。

そして、24年に私はウクライナに赴任した。広島という地でも核の惨禍の実態を共有した経験は、彼らと私の間に特別なつながりを生んだ。私自身も彼らと同じ地で暮らし、経験を共有したいという思いを強くした。現地では頻繁に顔を合わせ、広島での体験を折に触れて振り返った。広島は、時と空間を超えて人々を結びつけ、人生を変えるほどの影響を与えているのだと実感している。

随時掲載します